＜図書紹介＞

『道徳は本当に教えられるのか　－未来から考える道徳教育への 12 の提言－』
田沼茂紀編著　東洋館出版社　2023 年

立命館大学大学院教職研究科 2 年次生　馬場　思帆

【道徳を学ぶ意義】

道徳が教科化し、小学校では全国で「特別の教科　道徳」が始まって 4 年が経った。さまざまな実践が積み重ねられている一方で、曖昧な「心の教育」というイメージや教え込みともいえる指導がまだ少なからず残っていると言われている。そして、この間には、世界規模では感染症のパンデミックや国際戦争が起こり、国内では貧困や差別の問題がこれまで以上に浮き彫りとなり、社会のあり方が大きく変わろうとしている。

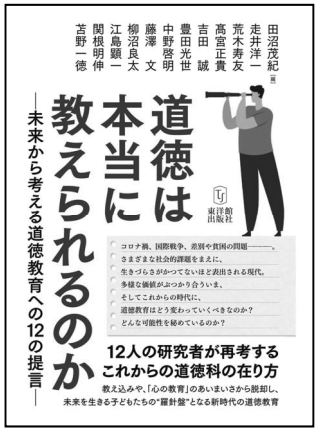
そのような時代においても、人は誰もが自分らしい生き方という最適解を信じ、果敢にも、その一歩を踏み出そうとする。その拠りどころとなるのが、自らの内なる人生の道標としての道徳性である。では、そんな人生の生き方を示す羅針盤とも言うべき道徳性を学校教育でどう培っていけばよいのか。激動の時代を迎えるいま、そして未来において、道徳科は現状のままで、本当に子どもたちに「生きる力」を授けられるのか。VUCA と呼ばれるこれからの時代を生きていく子どもたちに、「いま」の道徳科はこのままでよいのか。その問いを解決するには、一度立ち止まって、道徳科を学ぶ意義を見出していく必要があるだろう。

【未来志向的探究型道徳学習観への転換】

本書では、次期学習指導要領を見据え、未来社会から考える「道徳科のあり方」を 12 人の研究者がそれぞれのスタンスでアプローチしている。その際、未来の課題を考えるにあたり、眼前の子どもたちが社会の構成員として活躍する 2040 年の社会を道徳教育充実達成期として想定して描かれている。「未来から考える」という視点の前提には、いくつかの問いが掲げられる。「未来から俯瞰したら、現在の“心の教育”といった曖昧な心理主義的ロジックで語られがちなわが国の道徳教育はどう評価されるのか」、「未来社会を生き抜く子どもたちの羅針盤となる道徳性を培う手法はどうか」、「未来での道徳性育成方法はどう確立されるのか」等である。

そこで、第一章「だれが学ぶのか」、第二章「どのように学ぶのか」、第三章「なにから学ぶのか」、終章「何のために学ぶのか」という章立てを行って、その解を紐解いている。

この本を読んだ感想として、例えば「授業で終わらない考える道徳をどう実現するのか」という問題に出てくる“もやもや”は、道徳の授業を教える上でのキーワードとなるだろう。



また、実践で使える手法も多くちりばめられている。「道徳授業の在り方」を読者とともに考えるおすすめの 1 冊である。